知る　学ぶ

お年玉を勉強する！

小中学校　お金の大切さも考える

みなさんは、お正月をどのように過ごしましたか。新しい年のうれしい贈り物であるお年玉は、日本の伝統文化であり、長引く不況とあって、お金の大切さを考えるきっかけにもなります。そんな視点で、お年玉について学ぶ小中学生を取材しました。

（小6・市塙洋平、中1・大寺健登、高1・延山実千鼓記者）

包む袋を和紙で折る

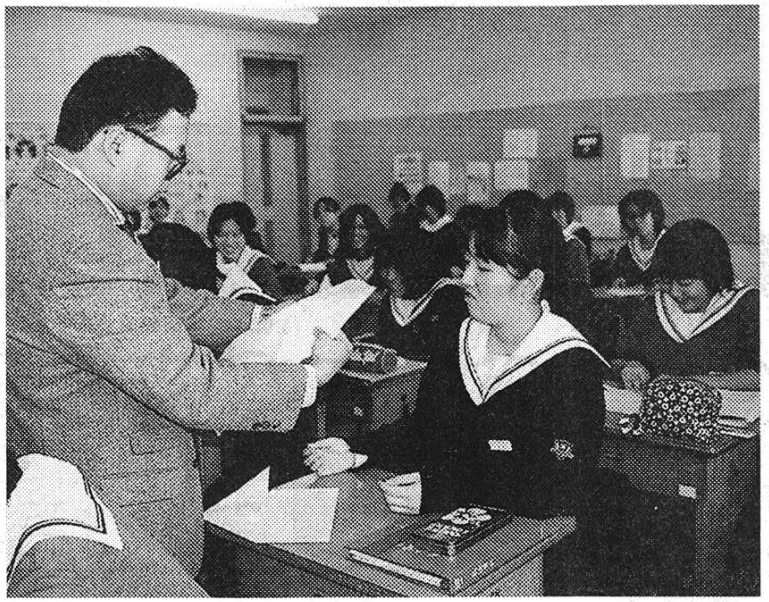
――千葉・聖徳大付属中で文化の授業

千葉県松戸市にある聖徳大学付属中・高校の生徒たちは正課の授業で、年中行事の由来や浴衣の着付け、正座の仕方など、核家族化で伝えられにくくなっている日本の伝統文化について学んでいます。

昨年暮れ、中学三年のクラスで「お正月の文化」についての授業がありました。まず一人一人がお年玉の袋を作りました。同校教諭で小笠原流礼法総師範の柴崎直人さんの手順に従い、白い和紙を折り紙のように折っていくと、正面に鶴の飾りがついた袋ができました。こんなふうに贈り物を包む方法は、「折形」と呼ばれる日本の伝統文化です。

「単にお金を包むだけではなく、贈る人の心も包み込んでいます」と柴崎先生。なるほど、袋の裏面の紙は、右が上になっていて、右利きの人が開けやすいように、心づかいがされています。生徒の柳裕美さんは「折るのは難しかったけれど、日本の伝統を感じさせますね」と話していました。

柴崎先生によると、「お年玉」とは年の初め、神様から賜るものという「年賜」や、神様の魂をいただくという「年魂」に由来し、もともとは、神様にお供えした後、分け合って食べる鏡もちのことを指していました。お金を贈るようになったのは、戦後からだそうです。



和紙でお年玉の袋を作る生徒たち（聖徳大付属中で、左は柴崎先生）

「全額貯金」クラスで10人

――東京・江東区立第四砂町小で調査

東京都江東区立第四砂町小学校（中村和夫校長）の三年生の加賀美学教諭のクラス（二十七人）では年明けに、お年玉についてのアンケートを行いました。総額は「五千円以上二万円未満」が十三人と最も多く、ひいおじいさんやひいおばあさんからもらったという子もいました。使い道は、「一部は使い、残りは貯金したり、とっておく」が十七人、「全部、貯金するかとっておく」が十人。「全部使う」はゼロでした。

また、同校でふだんのお金の使い方について、昨年度の三年生に尋ねた調査では、「友だちにおごったりおごられたりしたことがある」と答えた子どもは半数近くを占めていて、低学年から、友だちとの関係に、お金がかかわっていることがはっきりしました。

金融広報中央委員会（事務局・日本銀行）の三好広さんは「経済の先行きがよくわからない時代、お金を有効に使うことがより大切になっています。お年玉をきっかけに、家族で使い道を話し合ったり、こづかい帳をつけ始めたりしてみては」と話しています。

今年は1人平均2万5350円

みずほ銀行が今月、東京都内の小学四―六年生とその母親それぞれ五百七人を対象に行った調査では、もらったお年玉の合計金額は平均二万五千三百五十円で、前年より百八十八円減りました。男子の平均は二万六千八十二円で、女子より千四百六十七円多かったです。

文化を実感　だから大事に

☘取材を終えて　柴崎先生の授業で、私もお年玉の袋を作りました。もし、ていねいに包まれたお年玉を手にできたら、市販のポチ袋を開ける時よりも、きっとおごそかな気持ちになることでしょう。お年玉も日本の伝統文化の一つと実感することができ、大事に、計画を立てて使いたいと思いました。紙を折るという文化には、日本人の器用さや芸術性がよく表れているので、外国人と接する機会には、折り紙や折形を伝えたいと思いました。（N・M）